令和５年度　いのちの授業　事例集（中学校）【国語】

掲載数 10

	地区	学年	教科等	テーマ	内　容	参考事項（講師・教材等）
1	相模原市	中３	国語	「挨拶－原爆の写真によせて」	命を、一瞬にして「二十五万の焼けただれ」にする原爆を、所持し続ける選択をしているのは人類である。現代は、かつてより更に地球が「生と死のきわどい淵を歩」いている。本作品は、他人事のように無関心でいる私達の在り方を告発する。作品を読み深めながら、悲劇を繰り返さないために私達がもつべき決意や在り方を考えさせた。	光村図書「国語３」
2	横須賀市	中２	国語	「セミロングホームルーム」	背中にセミがついている気弱なクラスメイトを気遣い、どうやってセミを取り除くかを悩む主人公と隣の席の生徒、担任のやりとりを描いた文学作品。 文章を読み進めながら、「なぜ気弱なクラスメイトに直接言わないのか」「気付かないように主人公たちが動いているのはなぜなのか」といった気弱なクラスメイトを思いやる登場人物たちの心情に共感させた。	
3	湘南三浦	中２	国語	モアイは語る ――地球の未来	豊かな資源にあふれていたイースター島が、森林の減少による食糧難で争いが起き、文明が滅びてしまったことを根拠に、現在の地球はどのような状況か考える授業を行った。筆者の主張と現在の地球の状況を照らし合わせ、果たして主張が正しいのか、イースター島と同じ運命をたどってしまうのかを考えた。	総合的な学習の時間にＳＤＧｓについて触れる機会があり、簡単ではあるが関連付けて考えさせた。
4	湘南三浦	中３	国語	挨拶	「挨拶」という原爆をテーマにした詩を学習した。戦争による突然訪れる悲劇と平和な日常の違いから命の尊さと突然奪われることでの命の儚さを学んだ。	
5	湘南三浦	中３	国語	平和	井上ひさしさんの『握手』を通し、「戦争」や「どう生きるか」にちて考えた。	握手
6	県央	中３	国語	「レモン哀歌」	作者が妻の最期のときを詠んだ歌。この作品に描かれている生と死について考えさせる授業を行った。歌に使われている言葉の意味をひとつひとつ考えさせ、死の間際でも力強く生きようとする命の輝きを捉えさせた。「哀歌」でありながら「レモン」や「トパァズいろ」などのみずみずしい言葉から、生徒は命の輝きをしっかりと捉えることができた。	東京書籍 「新しい国語」３
7	県央	中複合	国語	国語科 「いのちの作文」	国語科の全学年の「書くこと」の指導の中で、「いのち」について感じたことや考えたことを文章にするという授業を行った。生徒は、ニュースや新聞から感じるいのちの大切さや広島の平和学習で考えたこと、地域にある養豚場と自分が食べている食物についての関係についてなど、作文を書く中で一人ひとりがいのちについて幅広く考えた。	中学１年生～３年生国語科の教科担任による「書くこと」指導

8	中	中２	国語	平和の尊さ	学童疎開という現代では考えられない状況に戦争によっておかれた作者の妹の気持ちやその妹を離れて思いやる「字のないはがき」という形で安否確認をとり、父親の深い愛を感じ取る中で、平和の尊さや命の大切さを実感し、考えてもらう授業をした。	光村図書　国語2年 「字のないはがき」
9	中	中３	国語	いのちの大切さについて考え、自分の思いを文章で表す	東日本大震災直前に生まれた「真奈ちゃん（仮名）」と、その母を取材したＮＨＫ取材班による記録である「あの日 生まれた命」を読み、震災直後で、子どもの誕生を素直に喜べない複雑な母の思いや、被災者への支援「君の椅子」プロジェクトを実行した人の思いを探ることで、命の尊さについて考えさせる。また、自身の経験を振り返り、その思いを文章にすることで、自分も他者もかけがえのない存在として捉え、自他の生命を大切にすることについて考えを深めさせた。	授業者：国語科教員 教材：光村図書　中学道徳３「あの日 生まれた命」ＮＨＫ取材班
10	中	中１	国語	道徳授業 「自然愛護」	人間がともに生活する動物には「家畜」「ペット(コンパニオンアニマル)」「野生動物」がある。それぞれの動物に対して人との関わりがある。野生動物は本来は人との関わりは少ない動物である。その野生動物と人との生活圏が重なることで悲劇が起きることがある。授業の中で生徒は野生動物の命を大切にすることとはどのようなことか。人間と野生動物の共生の方法について考えを深めた。	光村図書道徳教科書